

参議院議員
Shizuka
Terata

てらたしずか



全25市町村を歩く。

これまでも、これからも。

皆様、こんにちは。この一年の活動をまとめた広報紙をお手に取って頂きありがとうございます。議員5年目となったこの一年は、所属している農林水産委員会の様々な課題はもちろん、私自身のライフワークである女性や子どものこと、社会的養護のこと、私たちの生活にも既に影響を与えている気候変動と激甚化する災害対策について取り組んで参りました。また、コロナ禍が一段と落ち着きを見せたこともあり、県内の農家の皆様や保育園・幼稚園などを訪問させて頂くとともに、国際教養大学や母校である早稲田大学、講師としてお招き頂いた学習院女子大学などにも出かけ、普段の生活であまり接点がない20代の皆様の声に耳を傾ける機会をもつよう努めてきました。

この一年、前進をさせることができたと思えるものもあれば、永田町が混乱するなか、残念ながら物事が進まないと感じることもありました。政治不信が高まりを見せておりますが、一つの党や特定の政治家の問題とせず、しっかりと一人ひとりの政治家がその誠実な活動を通して、皆様の不信感の払拭に努めていくことが肝要であると思います。これからも皆様からの信頼を得られるよう真摯に歩みを進めて参ります。

寺田 静

〔クマを指定管理鳥獣に〕

すみ分けでクマとの共生を



▲農林水産委員会での質疑

引き続き国会では農林水産委員会でも頑張っています。大きな前進を見せたのは、地元から不安の声が寄せられていたクマへの対策強化。4月にクマを「指定管理鳥獣」に追加することができました。「指定管理鳥獣」に指定されると捕獲や生息状況の調査のために国から交付金が出るようになります。これまではシカとイノシシのみが指定されており、クマは指定されていませんでした。環境省は当初難色を示していましたが、私の他にもクマによる被害が大きい北海道や東北の議員が要望し、また専門家会議からの提案も受け、追加されることになりました。併せて、人と森の動物との緩衝帯を整備することや、自治体におけるクマ対策の専門的な人材の育成・確保などを支援する農林水産省の取り組みも発表されました。

世界を見渡しても、秋田のように人口があり、同時にクマの生息数も多いところは珍しいとのこと。すみ分けることが肝心です。自然豊かな秋田に生まれた者として、正しい知識に基づいた対策で、クマとの共生を実現できるよう努力を続けて参ります。

〔記録的な大雨被害〕

誰一人取り残すことのないように

昨年7月の記録的な大雨で主に県央、県北部で建物浸水や土砂崩れ、農地や農業施設が被災するなど甚大な被害が発生しました。私は参議院災害対策特別委員会の委員とともに、地元議員として五城目町と秋田市の被災現場を視察。県庁での情報交換では佐竹知事、穂積・秋田市長、渡邊・五城目町長から現場の被害認定のご苦勞を聞き取り、国会での議論につなげました。

大雨から10カ月経った今も浸水した住宅の再建が進んでいない被災者がおり、道路や橋などインフラの復旧工事

〔コメと食料自給率〕

秋田の農業を守りたい



▲上小阿仁村の田んぼの前にて

一昨年の夏に農林水産委員会に加えて頂いてから、国会で東京にいるときは野菜や肉、牛乳などがスーパーの棚に並んでいることが当たり前でないことを意識するように。また一方で、地元に戻ると、幼い頃から当たり前のように目の前に広がっていた田んぼや畑は減り続け、今ある田畑もこのまま維持されていくのは難しいということをやより考えるようになりました。

日本の食料自給率は38パーセント。国際情勢や気候変動による食料生産の不安定化でお金を出せば食べ物が買える時代ではなくなった今、国内の生産力を上げることは喫緊の課題です。輸入に依存している畜産飼料の国産化、小麦・大豆の生産拡大はもちろん、国内で自給可能なコメの消費量を増やすことにも取り組むべきだと考えています。農林水産省の方の話を聞くと、すでに諦めているように感じますが、コンビニのおにぎりやパックごはんのように、発売当初は「売れっこない」と思われていた商品で、コメの消費は伸びています。まだまだやれる余地があるはず。コメどころ秋田の議員として、頑張って参りたいと思います。

も終わっていません。住宅応急修理の申請期限は7月までですが、制度自体ご存じない方もあり、床上浸水した世帯でも高齢困窮世帯など申請できていない世帯が多くあります。同様に生活再建支援金も8月までに申請しなければ受給できません。両制度の申請期限を延長してほしいとの要望も頂いており、働きかけを続けています。

誰一人取り残すことのないよう努力を続けて参りますので、お困りごとがありましたら地元事務所までご連絡ください。

日本の代表として国際会議に参加



▲たくさんの学びを得た各国の国会議員らとともに

4月、ノルウェーで開催された「第8回国際人口開発会議 行動計画実施のための国際国会議員会議 (ICPD/IPCI)」に参加して参りました。本会議は、性と生殖に関する健康と権利 (SRHR) についての世界的な政治的合意を形成するために設けられた唯一の場。このように大きな国際会議に日本の代表として参加するのは初めてであり、118カ国から集まった300名の国会議員や国連機関の代表らに囲まれ、また壇上で英語でスピーチをする機会もあったことからとても緊張しましたが、得るものが多い3日間となりました。様々なテーマで議論が交わされ、最終日には各国が一致して人口問題に取り組む決意を示す共同声明が出されました。

閉会式での主催者の挨拶を紹介します。

「私たちはそれぞれ違うところから来た。支援する側の国から来た人、支援を求める国から来た人。人口が1万人ほ



▲壇上にてスピーチをする機会に恵まれました

どの国から来た人もあれば、億を超える国民がある国から来た人もいます。家族計画のための手段がある国もあれば、そうではない国から来た人もいます。中絶が可能な国もあれば、子どもを産むことを強いられる国もある。二人の人がいて、りんごとアイディアをそれぞれ持っているとする。りんごはあげたらなくなるけど、アイディアは互いにあげたら二つずつ持てる。だから一緒にやること、集まって話すことに意味がある。地平線を眺めて、あなたが今手にしている知識と力を思っ。あなたの旅路は10歳の女の子の人生を永遠に変えることができる。ともに努力すれば今日とは違う夜明けを迎えられる。闇が長いと感じても、太陽は必ずあがって明るい朝が来る」

素晴らしい会議に参加できたことを国会に送り出して下さった秋田の皆様感謝するとともに、今の立場でできることに力を尽くすことを誓いました。

〔秋田のまなびを考えるネットワーク〕

子どもたちの最善の利益のために

3月に「秋田の『まなび』を考えるネットワーク」が発足しました。県議会議員の櫻田さんの呼びかけで、子どもを取り巻く課題に取り組んでおられる約40人が集まりました。

私自身は不登校を経験し、高校を中退して大検を取って大学へ進んでいることもあり、不登校にまつわる課題の解決は私のライフワークです。私が理想だと思うのは、すべての学校が一人ひとりの子どものありのままを受けとめる場所になること。フリースクールなどの選択肢が乏しい地方にあってはなおさら公教育、普通の学校が変わらなくては、子どもも保護者も救われません。それと同時に、やはりどんなに理想的な学校ができたところで、すべての子どもたちがそこにフィットするのかといえば、そうではな

く、だからこそ、多様な学びの場、そしてホームスクーリングを含めて、すべての子どもたちが学び育つ場所に一定の公的な支援があることが重要だと考えています。

このネットワークには、様々な属性、興味関心を持った方が集まりました。不登校や学校の在り方だけではなく、子どもたちを取り巻く課題は山積しています。虐待やネグレクト、そこから生じる社会的養護、貧困、障がいをもつ子どもや医療的ケアが必要な子どもたちの教育、入院中の子どもたちの教育の課題など。一人ひとりのかけがえない子どもたちの最善の利益のために、何がどう変わったらいいいのかということ、県内各地の皆様と一緒に考え、一つひとつ解決していきたいと思ひます。

未来に向けてより良い社会を手渡す



▲「田原カフェ」に参加された皆様と

若い世代との対話も大切にしています。昨年10月には国際教養大学で開催された「県ゆかりの議員と語るラウンドテーブル～政治分野での男女共同参画について考える～」にお招き頂きました。私自身が議員を目指したきっかけやその際の葛藤、選挙活動で大変だったこと、議員活

動のなかで感じていることなどをお話しさせて頂きました。学生からは、政治家になるために必要なこと、SNSによる選挙のあり方の変化、ワークライフバランスをどう確保しているか等、時間を終えてからもたくさんの質問を頂きました。

また、こちらは東京での開催でしたが、8月にはジャーナリストの田原総一郎氏が主催する「田原カフェ」にお邪魔しました。この会は田原氏が20代や30代の若者の話を聞きたいということから始まったもので、この日は20名ほどの若者が参加。大学生から社会人まで様々な背景や経験をもつ皆様と意見交換させて頂きました。

若い世代から大きなエネルギーを受け取る良い機会となり、一層これからの世代により良い社会を手渡したいと思いました。頑張ります。

コラム

横手で暮らす 母を想う



▲母と息子とテーブルいっぱいのお料理を囲んで

コロナ禍が落ち着いた昨年の秋、横手で暮らす実家の母が久しぶりに上京しました。

「実は少し前から足腰がおかしく、このまま歩けなくなったらどうしようと思っていた。学生時代の友達に会ったりするのはこれが最後かもしれないと思いながら東京に来た」と。

70代前半ながら、3度の手術を経て、両脚に人工関節が入っている母。月に一度くらいは会って話をしていたものの、そんなことを考えていたとはつゆほども知らずにおりました。

老いは分け隔てなく誰にでもやって来て、誰もが歩けなくなる時が訪れます。歩けなくなっても大丈夫、そう思えるように、終の住処を自分の意志で選択できる、住み慣れた家で暮らし続けなければそのための十分な支援がある、一人でも多くの方がそう感じられる秋田と日本を、母のためだけではなく、これから老いていく自分や次の世代を含めたすべての人のために作っていく努力を、皆様と一緒に続けていきたいと思っています。

てらたしずかを応援してください。

[こちらから登録](#) >>



- LINEで随時活動報告をしています。ご登録よろしくお願いします！
- ご町内の夏祭りや会議、会社の忘新年会など、お声がけいただければ駆けつけます！
- 広報紙をご友人に配ってくださる方に必要部数をお送りします！